

青木周蔵の渡独前の修學歷（4）

——長崎遊学時代 その二 修学——

森 川 潤

（受付 2016年5月13日）

はじめに

慶応3（1867）年6月10日（1867年7月11日）、青木周蔵は梅雨空の蒸し暑い日、好生堂舎長の松岡勇記とともに長崎にたどりつく¹⁾。周蔵は、萩藩医団の中枢にある日野宗春、竹田祐伯、坪井信道などの推薦により「醫學修業」のために長崎に派遣される²⁾。周蔵は「遠遊」、すなわち海外留学を切望していたが、長崎に送りだされたとしても、海外留学が約束されていたわけではない。それは、藩政府が「西洋研究を嫌ふ爲め」ではなく、「希望者の續起して費用の給し難きを虞れし爲め」である³⁾。討幕運動を先導する萩藩には財政的な余裕はない。周蔵は、長崎にたどりつく、医学遊学生として修学しながら、萩藩政府に海外留学の許可がおりよう画策する。しかし、もともと「醫者嫌ヒ」の周蔵が「醫學修業」に専念したとはおもわれない。

周蔵は、慶応3（1867）年6月から1年あまり長崎に滞在し、慶応4（1868）年8月に萩藩留學生としてプロイセンへと旅だつ。プロイセンは、対オーストリア戦争後に成立した北ドイツ連邦を基盤として、普仏戦争の勝利によりドイツ統一をなしとげる。1871年のドイツ帝国の成立により、プロイセンはドイツに覇権を確立する。

青木周蔵は、長崎における足跡について多くを語ろうとしない。自伝⁴⁾は、1年あまり滞在した長崎については寡黙になる。山口県文書館には、長崎滞在中、周蔵が日野宗春や竹田祐伯に書きおくれた数通の書簡がのこされている⁵⁾が、多弁な周蔵は、書簡においても、長崎での修学の日々について口を噤む。

周蔵は、長崎という空白の時代に、なにを考え、なにをまなんでいたのであろうか。本稿では、周蔵の長崎における修学の足跡を再構成したい。

I. 天領長崎

慶応3（1867）年3月、長崎奉行は長崎と小倉をむすぶ長崎街道の難所である日見峠、茂木口とも呼ばれる茂木街道の田上峠、西山口、浦上街道の西坂の4ヶ所に関門を設け、島原、平戸、大村の諸藩兵が往来する人びとを検問する⁶⁾。長崎奉行は、5月には、長崎で商工業にたずさわるものの子弟を100名ほど徴募し、長崎市中警備のために小銃隊を組織する。7月

には、長崎奉行は役職のない町人を遊撃隊に編入し、兵役につかせる。遊撃隊の任務は、往来人の監視と居留地の警護である⁷⁾。9月には、幕府撤兵隊290名が京都から海路来訪し、長崎に駐屯し、市街を巡邏警備する⁸⁾。天領長崎は、討幕派の志士が暗躍する温床になり、孤立しはじめていた。

天領長崎は、萩藩の人びとにとっては敵地である。萩藩が朝敵となり、幕府とも敵対するようになるのは、元治元(1864)年7月の禁門の変以降のことである。萩藩は、急進的な尊皇攘夷論をかかげ、京都において政局を主導していたが、文久3(1863)年8月18日の政変により京都から追放され、藩主の毛利敬親は官位を剥奪され、世子定広(元徳)とともに萩城外の天樹院に閉居する。翌元治元(1864)年6月、ふくばらもとたけ 福原元佃、ますだちかのぶ 益田親施、くにしちかすけ 国司親相の三家老が「去秋以來父子始如何様之御譯柄共難被奉伺曖昧の御處置を以て勅勘を相蒙り」⁹⁾、国元において謹慎する藩主と世子の冤罪を朝廷にうたえるために上京する。嘆願はうけいれられず、三家老がひきいる先発隊が暴走し、蛤御門に進撃する。先発隊は撃退されるが、京都市中では戦火により3万戸が焼失する。事変の直後の8月、幕府はつぎのように諸藩に達する¹⁰⁾。

松平大膳大夫家來共、迫禁闕發砲狼藉ニ及候條、不屈之至ニ付、御征伐被遊候ニ付而者、長藩人銘々之領分知行内ニ潜伏之者可聖探索旨、兼而相違置候得共、海岸屬島等江同家々來乗組、且同藩荷物等積込候船々も有之候ハ、見掛次第無二念速ニ繫留可申候

すでに萩藩討伐の勅諭がくだされていたが、幕府は「長藩人」や萩藩の船舶を探索し、見つけしだい捕縛するよう諸藩に命じる。さらに、つぎのように諸藩に命じ、萩藩に武器、米穀などを搬入することを禁じる。実質的な封鎖策である¹¹⁾。

武器其外米穀等を始、諸國より長防兩國江輸入候儀不相成、萬一海上陸路とも運輸致候もの有之候ハ、近隣國々において急度差止、尤時宜ニ寄討留候而も不苦候

事変後間もなく、江戸だけでなく、天領にあった萩藩の土地や建物は幕府により接収される。長崎新町の蔵屋敷も接収され、9月には取り毀される¹²⁾。萩藩は、長崎での活動拠点をもうしない、政治的にも、経済的にも閉塞状況におちいる。

慶応2(1865)年1月、木戸孝允が上洛し、鹿児島藩邸において、小松帯刀、大久保利通、西郷隆盛と会談し、「長薩協約」、すなわち薩長連合をむすぶ。鹿児島藩は、西郷隆盛、大久保利通などの工作により公武合体から倒幕へと藩論を転換し、高知藩脱藩浪士の坂本龍馬や高知藩士の中岡慎太郎からの働きかけに応じ、萩藩に名義を貸し、武器、弾薬、船舶の購入に便宜をはかっていた。慶応元(1865)年11月に萩藩討伐の幕命がくだされると、鹿児島藩は大義名分がないとして出兵を辞退する。「長薩協約」¹³⁾第6条は「冤罪も御免之上は雙方誠心を以テ相和し皇國之御爲に碎身盡力仕候事」と明記する。

密約が結ばれた慶応2(1865)年の11月、両藩は「商社示談箇条書」をむすぶ。それは、藩際交易と国際貿易をむすびつける長崎と、北前船による交易と琉球貿易をむすびつける下関

を拠点とする西日本市場圏の支配をめざすものである¹⁴。予備交渉にあたったのは、萩藩は木戸孝允、広沢真臣、鹿児島藩は藩御用人外国掛の五代友厚（才助）である。斡旋したのは、坂本龍馬である。

慶応2（1865）年6月7日、幕府艦隊が周防大島を砲撃し、第2次幕長戦争の戦端がひらかれる。鹿児島藩に追随し、出兵を拒否する諸藩もすくなくなかった。芸州口討手の一番手を命じられた広島藩も鹿児島藩に同調する。6月13日には幕府軍が芸州口から萩藩領内に進撃するが、萩藩軍は7月18日には幕府の石州口の拠点である浜田城を、8月1日には幕府の小倉口の拠点である小倉城を陥落させる。小倉口で総督として指揮をとっていた老中小笠原長行は回天丸にのりこみ、長崎に脱走する。慶応3（1867）年1月、萩藩は小倉藩と講和をむすぶが、小倉城を含むきくぐん企救郡を占領下においていた。小倉は、長崎街道の入口である。

幕府は、將軍徳川家茂の病没を契機として、9月には萩藩と休戦協定をむすび、諸藩に「藝州口、石州口出張の御人数并諸家人数共不殘引揚候様」と達する¹⁵。翌慶応3（1867）年1月には、幕府は萩藩再征軍を解兵するが、処分問題は未解決のままのこされる。朝廷が萩藩主父子の官位復旧を公式に認め、その入京を許可するのは12月にはいつてからのことである。王政復古の政変がおこるのは、その翌日のことである。

周蔵が長崎にたどりついたころは、萩藩は「長薩協約」により孤立無援の状況から脱却していたが、長崎は長崎奉行が支配する幕府の直轄地であることにはかわりはない。

長崎では、鹿児島藩の五代友厚が萩藩の人びとに便宜をはかっていた。友厚は、安政4（1862）年に海軍伝習に派遣されて以来、長崎での滞在がながく、木戸孝允、高杉晋作、伊藤博文とも親交があった。しかし、友厚の個人的な篤志には限界があった。「佛學修業」のために長崎に滞在する遠藤謹助は、木戸孝允につきのようにつたえる¹⁶。

私事今度佛學修業出崎候事被_レ差免_レ難_レ有仕合奉_レ存候、乍_レ然薩藩へ依頼不_レ申候ては勿論滞崎不_レ相成_レ候處、今度五代歸國之節、俗吏之論大に起り五代は頻に長州人を崎陽に引込、薩號を爲_レ唱候とて甚八ケましく有_レ之候由に付、何卒私事は廟堂より彼藩之政府へ一言御頼被_レ遣候はゞ大に都合宣布（後略）

萩藩の人びとは、鹿児島藩の友厚に便宜をはかってもらわなければ、長崎に滞在することはできない。しかし、友厚が鹿児島に帰藩したさい、萩藩の人びとを長崎に招来するだけでなく、蔵屋敷にかくまい、鹿児島藩人の偽名をつかわせているとして、鹿児島藩士のあいだに友厚を非難する声がかまると。遠藤謹助は、鹿児島藩政府に萩藩の人びとを庇護するように公式に要請するよう萩藩政府にもとめる。謹助は、文久3（1863）年に井上馨、山尾庸三、伊藤博文、井上勝とともにイギリスに密航し、慶応2（1866）年に帰国していた。

萩藩政府は、慶応3（1867）年4月、長崎をおとずれる萩藩人を庇護するよう鹿児島藩に依頼する¹⁷。

(前略) 先年来、銃鑑買入其外御厄介之件々御頼仕候処、諸事被掛御賢慮御厚情之至万謝不斜、挙国感銘罷在候、就而者御挨拶御一礼旁頓ニも可得御意筈之処、混雑ニ取紛御無沙汰打過心外之至候、此段御降恕之程所冀御坐候、尚亦、此度、遠藤謹助、河北義次郎其外、別紙之者共、洋学為修業、長崎表差越候、然処、御承知之通、弊藩之儀者、積年来他出難洪之儀ニ付、重畳乍御手数、御依頼仕候間、尊藩御家来之御唱ニなり共被成下、滞崎修業相成候様、万端御駈曳致御頼候

慶応元(1865)年7月末、井上馨(聞多)と伊藤博文(俊輔)が長崎におもむき、海援隊の周旋により鹿児島藩蔵屋敷に潜伏する。夜になると、イギリス人貿易商グラバー(Thomas Blake Glover)邸をたずね、「薩摩の留守居役」として小銃と蒸気船の購入交渉をおこなう¹⁸⁾。萩藩は、鹿児島藩の名義によりグラバーから銃器や艦船を買い入れる。慶応2(1866)年1月の「長薩協約」により文久2(1862)年の政変以来の鹿児島藩にたいする萩藩の人びとの敵愾心はうすれていた。萩藩政府は、長崎に派遣した遠藤謹助、河北義次郎などの遊学生のために修学の便宜をはかるよう鹿児島藩に要請する。鹿児島藩が要請をうけいれたために、萩藩人は長崎に足を踏み入れるさいには鹿児島藩の蔵屋敷に寓居し、鹿児島藩士の名義をかりることになる。

萩藩政府は、大村藩にも同様に要請する¹⁹⁾。

(前略) 先年来、迫々弊藩之者崎陽差越候節、不一形被懸御賢慮御厚情之至万謝不斜候、就而者御挨拶御一礼旁頓ニも可得御意筈之処、混雑ニ取紛御無沙汰打過候段心外之至候、此段御□可被成下候、尚亦、此度、遠藤謹助、河北義次郎其外、別紙之者、洋学為修業、長崎表差越候、然処、御承知之通、弊藩之儀者、積年来他出難洪之儀ニ付、委曲、薩藩江も相頼越候得共、尚亦乍御手数、御依頼仕候間、被仰合諸事御駈曳、滞崎修業相成候様致、御頼候

大村藩では、アメリカ東アジア艦隊の浦賀来航を契機として、藩論が佐幕派と尊皇派に二分する。そのなかで、少壮の家臣が「三十七士同盟」を結成し、尊皇を鼓吹する。藩主大村純熙は、元治元(1864)年10月、佐幕派の浅田弥次右衛門を家老職から解任し、城下の大給以上の藩士を招集し、藩論を尊皇に一定すると宣言する²⁰⁾。大村藩は、元治元(1864)年12月には、長州征討中止の建言を幕府に提出する。

慶応2(1866)年11月、木戸孝允は丙寅丸で鹿児島におもむき、藩主島津忠義父子に謁見し、萩藩主敬親父子の謝状を奉呈する。その帰途、大村藩にたちより、「藩の重臣」と会談する²¹⁾。大村藩は、戊辰戦争にさいしては、萩藩、鹿児島藩と連合し、討幕運動につきすすむ。周蔵は、萩藩から長崎におもむいた人びととともに、鹿児島藩や大村藩の庇護のもとで遊学生活をはじめた。

II. 医学修業

周蔵は、慶応3（1867）年4月、萩藩庁から、つぎのような辞令を手交される²²⁾。

研蔵嫡子

青木周蔵

良哉嫡子

松岡勇記

右醫學修業として肥前長崎被差越候付月別

金五両充出立日乃往キ十二月分被立下候事

卯四月十四日御蔵元役江達之

周蔵が長崎に派遣される経緯は、慶応3（1867）年夏、すなわち藩庁から長崎遊学の辞令を手交される前後に木戸孝允の執事にあてた「野稿一章」と題する上書²³⁾からうかがいしることができる。

〔歐洲ノ書ヲ讀ム以來、居常自謂一度歐洲ニ遊ビ、健康士官ノ大業ヲ修メ〕

故ニ積年ノ志願、知己ト雖氏漫リニ之ヲ告ス、獨半井春軒ト其志ヲ同フシ、空シク機會ヲ待ツノ際、今春坪井信道ト語り、談話吾道ノ堆廢セルニ及ベリ時、居常ノ憤懣語氣ニ發スベシ、信道ノ恒徳ヲ待ツ、尔來極テ厚シ、後某日更ニ恒徳ガ志ノ嚮フ所ヲ因テ詳悉之ヲ荅ヘ隱ス所ナシ、信道殊ニ喜ビ、竹田祐伯日野宗春等ト謀リ、偶河北義二郎亦之ヲ賛シ、恒徳ヲ官府ニ薦ノ筈ヲ崎陽ニ負シム、於_レ是積年ノ志願些シク報シ、愁眉聊カ開ノミ、

周蔵は、「歐洲ノ書」を繙読するようになると、西欧に遊学し、「健康士官ノ大業」をおさめたいという願望をいだくようになる。「健康士官」とは軍医のことである。「知己」にも、それを告げず、志をおなじくする半井春軒とともに、ひそかに洋行の機会をうかがう。坪井信道と「吾道ノ堆廢」について話す機会があり、後日、周蔵は信道に「志ノ嚮フ所」を述べた。

信道は、天保3（1832）年、周蔵の養父である周弼の旧師坪井信道の嫡子に生まれ、信友と名づけられる²⁴⁾。信友は、信道が嘉永元（1848）年11月に病没すると、15歳で信道を襲名し、江戸在勤の萩藩医の地位をうけつぐ。2代目信道は、安政5（1858）年3月以降、江戸の桜田藩邸で毎月2、3回ひらかれる蘭書会読会にも積極的に参加する。元治元（1864）年8月の禁門の変のち、萩藩に追討の勅命がだされる。江戸在府の萩藩士がことごとく拘禁されるなかで、信友はみずから出頭し、幽閉される。2年後の第2次幕長戦争後に和議がむすばれると、信友は萩藩に護送される。山口では、「幼侯ノ副執匙」、「好生堂長防兩國／医業録所教諭役兼大病院総管」に任じられ、藩医団の重鎮として遇せられるが、慶応3（1867）年5月に病没する。肺結核であったといわれる。周蔵が長崎に旅だつ直前に没したことになる。

藩医の先輩である半井春軒も、海外留学の希望をいただいていた。春軒は、周蔵よりも 8 歳年長の天保 7 (1836) 年の生まれ、30 歳である²⁵⁾。好生館にまなび、安政 2 (1855) 年には舎長に任じられる。文久 2 (1862) 年には、長崎におもむき、松本良順の門生としてオランダ海軍二等軍医ポンペ (Pompe van Meerdervoort) の医学伝習にくわわる。しかし、春軒は中途で修業を放棄せざるをえなくなる。翌文久 3 (1863) 年以降は、好生堂から派出され、下関砲撃事件、四境戦争、戊辰戦争における負傷者の治療にあたる。周蔵は、好生堂入学後わずか 1 年しかたない元治 2 (1865) 年 3 月に「好生堂病院御用掛り」としてかりだされる²⁶⁾。春軒は、好生堂の教授スタッフであり、臨床医でもある。周蔵は、好生堂の医生にすぎない。

信道は、周蔵の洋行の企図に賛同し、竹田祐伯、日野宗春といった藩医団の中枢部に諮り、周蔵を藩政府に推薦する。周蔵は、「吾道」、すなわち養父周弼が築きあげた萩藩における西洋医学の衰退を懸念する萩藩医団の期待を背負い、海外留学候補生として長崎に派遣される。

周蔵は、新地唐人荷物蔵の南に位置する西浜町の鹿児島藩蔵屋敷におちつき、児玉淳一郎、山本十助、吉田貫一、松岡勇記など 6、7 人の萩藩遊学生と起居をとにもする。周蔵は、松岡勇記とともに大村藩医の長与専齋のもとにかよう。専齋は、当時を述懐する²⁷⁾。

余は出崎の始めより市中に偶居し、日々講義の傍聴病院診察の傍観に出席するのみにて其他は旅寓に日を暮らし、伴い來れる人々及他の知友などを集め講習を事としぬ。其頃長州の人青木周蔵／子爵、松岡勇記醫術修業の藩命を帯ひて出崎しけれとも、件の次第にて通學も叶はず、世を憚りて姓名を變し陰かに尋來たりければ、他事なく交遊して講習を共にしけり。此の人々の縁故によりて木戸侯爵、伊藤侯爵、野村子爵其他長州の人々とも相知ることゝなれり。

専齋は、嘉永 7 (1854) 年 6 月に緒方洪庵の適塾にはいり、安政 5 (1858) 年の春には塾頭に推挙される。松岡勇記は、安政 3 (1856) 年 2 月に適塾に入門する。その前年には、長崎でオランダ語をまなんでいた福沢諭吉も上坂し、適塾に入門していた。専齋と勇記は、10 年来の知己である。専齋は大村藩医にすぎないが、「蘭学処の高名を得候人」であり、「病院にても扱方大に他生と違ひ」、「緒方の塾頭にて、九州第一と美評有之人」である²⁸⁾。専齋は、毎日、「講義の傍聴」と「病院診察の傍観」に出かけ、帰宅後には大村藩から同伴した村瀬三英、待山謙吉といった医生や知人のために「講習」をおこなっていた。マンズフェルト (Constant George van Mansvelt) の講義内容を噛み砕き、講義したものと思われる。萩藩人は、「件の次第」により幕府直轄の精得館に入門することはゆるされない。

専齋が萩藩の周蔵と勇記をうけいれたのは、大村藩が尊皇攘夷という藩論を萩藩と共有したからでもある。周蔵と勇記が長崎に派遣される直前の慶応 3 (1867) 年 5 月、萩藩の赤間関伊崎代官の久保松太郎は長崎におもむく。松太郎は、しばしば専齋をまねき、病気の治療もうける²⁹⁾。松太郎が専齋に接触したのは、医学を専門とする周蔵と勇記に修学の便宜をはか

るように要請するためでもある。長崎に潜伏する萩藩の人びとも専齋と面談したであろう。木戸孝允が長崎におもむき、「大村藩長與専齋に始て逢ふ」のは、慶応4（1868）年5月のことである³⁰。

長崎遊学中の周蔵は、書簡で2度精得館に言及している。ひとつは、長崎到着後ほどない6月28日付で日野宗春におくった書簡においてである³¹。

毎日蘭医之講釋と申テモ原書之殘數不_レ過_二半葉_一、患者モ不_レ出_二十人_一此モ僕等ハ診察不_レ仕候

オランダ人医師の原書講読は原書の残り半分になり、患者も10人にも満たない。もっとも諸藩の伝習生は「傍観」するだけで、診察はできない。「他人之目撃」をおそれる周蔵³²が、マンズフェルトの授業だけでなく、「診察」にも参加していたともうけとれる文面である。周蔵は、精得館への「通學も叶はず」、専齋のもとにも「世を憚りて姓名を變し陰かに尋來た」はずである。専齋などからの伝聞をしるしただけであろう。

精得館では、「教師が講義する時は幕府派遣の傳習生がテーブルに腰掛てやるのに、諸藩の生徒は畳の上で机の前へすわる」³³。諸藩の伝習生は、藩主が長崎奉行に「此方家來醫師某儀公儀御醫師御弟子分を以て蘭醫傳習傍聽仰付られ度奉願候」と願いで、許可を得なければ、長崎の医学伝習に参加することはできない³⁴。あくまでも幕府伝習生が正規生であり、諸藩の伝習生は聴講生にすぎない。「病院診察」、すなわち臨床授業では、マンズフェルトが「重なる病人」を回診し、患者の多くは幕府伝習生戸塚文海（静伯）が診察していた³⁵。諸藩の伝習生は、幕府伝習生の背中ごしに、遠巻きに「傍観」するだけである。

幕府伝習生は「長州人がやはり鹿児島藩になつて、前から精得館に這入込でゐた」ことに気づいていた³⁶。「長州人」のなかには、鹿児島藩士の名義をかり、精得館に伝習生として出入りするものもいた。このころ、精得館には、幕府伝習生の池田謙斎、土生玄豊、竹内玄庵、福井藩の山脇玄、橋本綱常（琢磨）、半井仲庵と実子元端、今井巖、徳島藩の長井長義、高知藩の萩原三圭、弟の真斎、大村藩の長与専齋といった諸藩の伝習生がいた。周蔵と同道した松岡勇記は、長与専齋、萩原三圭などとは緒方塾の同門である。鹿児島藩士になりすまし、精得館に出入りすることもできたであろう。周蔵も、鹿児島藩士大嶋洋一という名義をつかっていたが、それは書簡の差出人の名義にすぎない。

周蔵は、おなじころ、「木戸執事」にあてた「上書」においても精得館について言及する³⁷。

崎陽ハ蛮客渡來病院ハ蘭醫ノ教授スル所、而_シノ此事件ヲ白セハ足ルヲ不和者ト謂フト雖、院ノ風習伎倆ヲ主トノ讀書ヲ疎ンス、然_レモ患者ノ在局者居常二十輩ニ上ラス、人身解剖ノ如キハ蛮客ノ屍ニ非レハ割ズ、恒徳僑居已ニ月餘未タ之ヲ見ズ、故ニ毎歲或ハ唯ニ五人ヲ割キ、或ハ十人ニ過ル情有リト雖_レモ以テ經驗スルニ足ズ、吾病院ニ優ル_レ僅ニ一層ヲ加ルノミ

周蔵は、萩藩医学学校好生堂での医学教育を念頭に、ふたつの点に言及する。ひとつは、マンスフェルトの教室における授業についてである。周蔵は、元治元(1864)年春には萩藩医学学校好生堂に入学し、養祖父である青木周弼が生前に起草した好生堂改正規則にもとづき修学する。周弼は、江戸蘭学の中核的な存在であった宇田川玄真と坪井信道に師事する。原典主義と翻訳主義を特徴とする宇田川・坪井の学統を継承し、好生堂改正規則³⁸⁾に凝縮する。好生堂は、「文法書習讀」、「窮理書研究」、「三科之醫學」からなる「原書」課程を本科とする西洋医学学校である。「三科之醫學」は、「第一科」、すなわち「解剖學」・「生理學」、「第二科」、すなわち「病理學」・「治法學」、「第三科」、すなわち「藥性學 附本草」・「分析學」からなる。周蔵は、すでに「文法書習讀」から「窮理書研究」にすすみ、「三科之醫學」の「第一科」の基礎医学課程にすすんでいた。原典主義と翻訳主義の洗礼をうけた周蔵にとっては、「院ノ風習」、すなわち精得館での授業は「伎倆ヲ主ト詰」、「讀書ヲ疎ンス」ものにはかならない。

専齋は、宇田川・坪井の学統を継承する緒方洪庵の適塾において塾頭に推されるほどにオランダ語に習熟していた。緒方塾では、「リセランドの序文が読めると、すぐに塾頭になれる資格のあつたものじゃそうだ」といわれる³⁹⁾。専齋は、原典主義と翻訳主義の申し子ともいふべき蘭学者である。しかし、専齋は「摘句尋章の舊習」を脱し、「きわめて平易なる言語即文章」によって「事實の正味」を把握しようとするマンスフェルトの方針に共鳴する。マンスフェルトの医学教育は、「字書」が「机上のかさり物」にすぎないような、臨床に焦点化された医学である。専齋は、旧師緒方洪庵が予測していた「蘭學一變の時節」⁴⁰⁾が到来したことを確信する。幕府伝習生の池田謙齋も、江戸の医学所において、学頭が緒方洪庵から松本良順にかわったときに、「全く教育の方針が一転した」⁴¹⁾と述べている。良順は、長崎で師事したポンベの医学教育の課程を江戸の医学所において採用する。

長崎において幕府の医学伝習を主宰したのは、ウトレヒト陸軍軍医学校 (Militaire Academie te Utrecht) の出身者である。ウトレヒト陸軍軍医学校は、1841年以降、監察大将ベッケルス (Peter Lambertus Beckers) のもとで改革がおこなわれる。第1に、19世紀中葉以降、医学研究に自然科学・実験的方法がとりいれられ、医学研究が細分化する傾向が顕著になるが、そうした医学研究の動向に対応するために、教官が増員され、カリキュラムの充実化がはかられる。第2に、細分化された専門分野の研究動向に対応するために書籍や教材の予算が増額される。第3に、カリキュラムに対応して教科書が作成されることになり、教官が分担し、難解な古典語や外国語を使用せず、平易なオランダ語による教科書が作成される。こうした改革は、ウトレヒト陸軍軍医学校をあたらしい研究動向に対応できる実践的な軍医の養成機関へと脱皮させることをめざしたものである⁴²⁾。

オランダは、17世紀初頭に連合オランダ東インド会社を設立し、バタビアに本拠をおく。

日本、台湾、インドシナ半島、マライ半島、インドネシア、インド洋沿岸などにも商館をもうける。東アジア海域においてポルトガル、スペイン、イギリスに対抗するために要塞を築き、強力な艦隊を組織する。ウトレヒト陸軍軍医学校は、陸軍、海軍だけでなく、植民地や各地の商館に臨床医を供給する役割をになう。軍医は非戦闘要員ではあるが、戦場において傷病兵の治療にあたらなければならない。各地に流行する風土病や伝染病の予防や治療にあたらなければならない。ウトレヒト陸軍軍医学校は、実践的な臨床医の養成を主眼としていた。

長崎において、間接的にしても、周蔵がまなんだのは、西欧の最先端の医学である。それは、日本において独自に変質し、主流化した宇田川・坪井の学統とは異質のものである。オランダ語医書を繙読しなければ、西洋医学の「蘊奥」をうかがいしることができないと教え込まれた周蔵がマンズフェルトの方針に異議を申し立てたとしても不思議ではない。しかし、萩藩医団のあいだでは「吾道ノ堆廃」が認識されていた。それは青木周弼がつくりあげた萩藩医学校が西洋医の養成機関として機能していないことを意味する。萩藩医学校好生堂は、伝統的な漢方医学から脱却するために、「空論鑿説」を排し、「実学実験」をめざす⁴³⁾。「鑿説」とは「内容がとほしく、真实性のうすい説」（日本国語大辞典）である。しかし、原典主義と翻訳主義は空理虚談を生み出す可能性をはらみ、「実学」から遊離する危険性をもつ。周蔵に課せられたのは、洋行し、現代の西洋医学を萩藩に移植することである。

もうひとつは、病院における授業についてである。「人身解剖」について、「恒徳」、すなわち周蔵は「未タ之ヲ見ズ」と述べている。元治2（1865）年1月以来、精得館で研鑽する池田謙斎によれば、マンズフェルトは、つねひごろ「解剖をやらなければいけない」と主張し、「人体の細肢図並に画等の掛軸」、人体解剖図の掛け軸による解剖学、「解剖書講釈」、「外科新論」、「外科書講釈」などの「講釈」をおこなう。ポンペがフランスから輸入したキュンストレーキ、すなわち人体解剖模型も使用する。ロシア軍艦隊の乗組員が精得館に収容され、死亡したときには、「屍体解剖」もおこなう⁴⁴⁾。

周蔵によれば、精得館の入院患者は「二十輩」に満たない。それは、じゅうぶんな臨床経験をつむことが不可能であることを意味する。実際には、精得館の入院患者は「百人位」にもおよび、「二階と下とに餘程室数があつたが、それが一杯であつた」⁴⁵⁾。マンズフェルトは、毎朝、8時から10時までの2時間、「講釈」をおこなう。教室での授業をおえたのち、10時から12時まで伝習生をひきつれ、病室を回診し午後1時から外来患者の診察、治療にあたる。「陰囊炎」、「内障眼」、「痔漏切断」などの手術もおこなう。マンズフェルトは、「ボードインの時から見ると教へ方が旨くて」、「殊に診断學の時などはボードインなどちがって、規則正しく聴診打診などを授けた」⁴⁶⁾。午後1時から、外来患者の診察にあたる。

病院についても、周蔵は「吾病院ニ優ルヲ僅ニ一層ヲ加ルノミ」という評価をくだす。「吾

病院」とは、元治 2 (1865) 年 1 月に、下関砲撃事件、禁門の変、萩藩内での内戦における傷病兵や罹患者の治療のために好生堂に付設された病院であろう⁴⁷⁾。周蔵は、好生堂入学後わずか 1 年しかたっていないが、同年 3 月に「好生堂病院御用掛り」としてかりだされる⁴⁸⁾。雑用にたずさわるだけであったとしても、周蔵は戦病兵であふれる「病院」で勤務した経験はある。

周蔵が精得館の学科課程だけでなく、附設病院についても低い評価をくだすのは、オランダ人医師による長崎の医学伝習のレベルでは、「吾道ノ推廃」を挽回するためには効果的ではないという実態を浮き彫りにするためである。日野宗春にあてた周蔵の書簡は、萩藩医団への、長崎における活動報告書の性格をもつ。「木戸執事」にあてた上書は、嘆願書にほかならない。

慶応 4 (1868) 年 1 月、戊辰戦争の戦端がひらかれ、長崎奉行河津祐邦^{ひろくに}は長崎を放棄する。精得館にはマンスフェルトがもどり、周蔵も精得館に出入りすることになる。医学に関していえば、周蔵は長与専齋のもとでまなんだとすることができる。専齋は、マンスフェルトが教授する臨床に焦点化された医学に共感し、「蘭學一變の時節」の到来を歓迎する。間接的であったにしても、周蔵は、専齋を介して、空理虚談を脱した「実学」としての西洋医学をまなぶ。それは、現実の課題に相応する方法によって斬り込もうという精神にほかならない。

Ⅲ. 外国語の学習

周蔵が長崎にたどりついたころ、徳島藩の長井長義はすでに長崎で遊学生生活をはじめていた。周蔵と長義には、いくつかの共通点がある。藩医の後嗣であること、藩費により長崎に派遣された遊学生であること、のちに大学東校留学生を命じられ、プロイセンに派遣されたこと、ベルリン大学に学籍登録するが、医学を専攻しなかったこと、である。なによりも重要な共通点は、「醫者嫌ヒ」である点である。年齢も 1 歳違いである。

長崎遊学中の長井長義の日記をひもといてみよう。長義は、慶応 2 (1866) 年 12 月から慶応 4 (1868) 年春まで長崎に滞在する。長義は、周蔵とおなじように「醫者はどうも余り好きません」と回顧する⁴⁹⁾。以下は慶応 3 年 1 月 11 日の条である⁵⁰⁾。

十一日 晴、早起。朝食後病院^{ホスピタル}に赴き、多賀を誘引、立木に寄り、浦上子と同道、病院に行く。已に講釈始り半を過ぐ。午前病院室に行き、マンスヘルの診察を見、陰囊炎を切る。近藤を訪ね、午刻帰り、午餐し、岡田に行き、稽古終て立木に行く。武田、多賀、浦上、中瀬諸子と今朝病院^(まかないかた) 賄方にて買ふ所の牛を食ひ、小酌し帰り、蕎麦店に入り、玉子そば及トロ、そばを食ひ、此日疝癪起り、腹痛裏急後重に堪へず、脚を飛し上野に帰り、晚餐を喫し、文典を読み、記聞浄書し博物新編を読む。

長義は、長崎にたどりつくと、まず上野彦馬をたずね、翌日には何礼之^{がのりゆき}をたずね、翌々日

に「病院に入門し」、東脩をおさめる。「病院伝習料」は「月一步二朱」である。その翌日には「岡田」に入門する。「岡田」は、済美館の英語の助教であった「岡田誠一」であろう⁵¹⁾。長義の長崎での遊学生活は、出崎後間もない時期には、西洋医学の学修と英語の学習についてやされる。

周蔵は、「稟賦ノ醫者嫌ヒ」であるが、周蔵は医学を修学するために派遣された遊学生である。長崎では、西洋医学をまなぶために大村藩の長与専斎の居宅にかよわなければならない。しかし、周蔵が専斎の家塾ですごす時間は微々たるものである。人並みはずれた行動力は旺盛な探究心から生まれる。探究心旺盛な周蔵が鹿児島藩蔵屋敷にひきこもることはない。

長崎の遊学生にとっては、滞在がながくなれば、長崎はたんなる通過点ではなく、海外留学のための学習の場になる。海外留学をころごすものにとっては、外国語は不可欠である。長崎には、外国語をまなぶための場や機会があふれるほどにある。

第1に、日米修好通商条約の調印直後の安政5（1858）年7月に長崎奉行が立山奉行所の岩原屋敷に開設した英語稽古所に淵源をもつ語学伝習所がある。長崎奉行が管轄する語学伝習所は、外交関係の推移にともない英語稽古所、語学所、洋学所、済美館と改称するが、いくつか特徴をもつ。まず、語学伝習所はオランダ通詞の私底を補うために構想される。嘉永6（1853）年6月にアメリカ東アジア艦隊が、翌7月にはロシア極東艦隊が幕府に国交と通商関係の樹立をもとめ、浦賀と長崎に来航する。安政2（1855）年12月、幕府は長崎奉行に「洋学所」を創設するよう命じる⁵²⁾。それは、オランダ通詞のなかでも「熟達之者」が動員されたり、「病死」したりしたために、「御用弁熟達之者」がすくなくなり、「未熟之者」だけでは「翻訳通弁等差し支え」が生じるようになったからである。オランダ通詞だけでなく、「有志の輩」にも入学がみとめられる。外交の舞台においては、家職として世襲されたオランダ通詞や唐通事を通訳や翻訳にあたっていたが、より広範な社会層がかわる。

つぎに、語学伝習所は、開設当初から出島在留のオランダ人と来航イギリス人、すなわち外国語の会話を担当する外国人を教授スタッフにむかえる。文久2（1862）年2月、立山奉行所の東長屋へうつされ、語学所に改称する。語学所は、翌文久3（1863）年12月、江戸町の活版所跡に移築され、洋学所に改称する。洋学所では、英語とオランダ語が教授され、教授スタッフも12名に増員される。翌元治元（1864）年6月には、長崎奉行服部常純^{つねずみ}の要請により、長崎在住のアメリカ・オランダ改革派宣教師フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck）が英語を、長崎フランス領事デュリイ（Léon Dury）がフランス語を教授することになる。さらに同年12月には来航ロシア人がロシア語をおしえる。慶応元（1865）年7月、新町の萩藩蔵屋敷跡に校舎が新築され、翌8月に洋学所は新町にうつされ、済美館に改称する。学則が改正され、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、清語のほか、歴史、地理、数学、物理、経済などの諸学科も教授される⁵³⁾。もはやオランダ語が介在する余地はない。フルベッキ、

何礼之、柴田大介、岡田誠一などが英語を、デュリイ、平井義十郎、名村泰蔵がフランス語を、フルベッキはドイツ語も教授する。幕府医学伝習生の松本銈太郎、すなわち松本良順の長子は、フルベッキのもとで毎日1時間ドイツ語を学習する⁵⁴⁾。大学東校留学生として渡独する大石良乙、すなわち佐賀藩医の大石良逸（雪溪）の養子もドイツ語をまんでいた⁵⁵⁾が、長崎においてであろう。

江戸の開成所では、元治元(1864)年11月、開成所稽古規則（開成所稽古規則覚書）がさだめられ、「稽古有之學術」として、「和蘭学」、「英吉利学」、「佛蘭西学」、「獨乙学」、「魯西亜学」といった各国の語学をあげる。さらに、「天文学」、「地理学」、「数学」、「物産学」、「精煉学」、「器械学」、「畫学」、「活字術」といった「科」も列挙される⁵⁶⁾。語学は、幕府の近代化に必要な西欧の学問体系にもとづく学術や技術を学ぶための手段であり、そのために「二科三科兼学之儀勝手次第」として、語学と学術・技術との兼学が奨励される。教授スタッフの多くは、諸藩に籍がある洋学者であったが、慶応3年には、長崎精得館に勤務するオランダ人ハラタマ、済美館学頭何礼之が江戸の開成所に招聘される。有能な洋学者を総動員することによって、首府江戸の開成所を洋学の研究・教育の拠点にしようとい幕府の意図がうかがわれる。

長崎に隣接する佐賀藩は、慶応元(1865)年に済美館教師でもあるフルベッキを雇用し、長崎に英学塾致遠館を開設する。フルベッキは、済美館に週3日、致遠館に週3日出講する。佐賀蘭学寮から大隈重信、副島種臣などが致遠館におくりだされる。重信と種臣は、フルベッキのもとで英語だけでなく、「新約聖書の大部分と米国憲法の全部」をまなぶ⁵⁷⁾。フルベッキは、英語を教授するために雇用されるが、塾生との個人的な関係において聖書やアメリカ合衆国憲法の講読もくわわる。

第2に、済美館の教授スタッフはそれぞれ家塾をひらいていた。済美館が正規の課程であるとするれば、家塾はその補完的な役割をになう。家塾には、初学者を対象として文法などの初歩的な内容をおしえるものもあれば、上級者のための高度な内容を用意するものもある。その代表的なものとして、何礼之の家塾をあげることができる。礼之は、唐通事として修業をつむ。開国後、イギリス、フランス、ロシア、アメリカの艦船が頻繁に来航するようになると、プロテスタントの中国伝道の基盤をきずいたイギリス人宣教師モリソン（Robert Morrison）が編纂した「華英・英華字典」（A Dictionary of Chinese Language）を入手し、中国語を媒介として英語の発音と文法を習得する⁵⁸⁾。安政5（1858）年12月には、礼之は平井義十郎などの唐通事とともに、長崎に来航するイギリス船に乗り組む中国人に英語をならう。翌安政6（1859）年1月には、長崎に停泊するアメリカ船におもむき、2週間にすぎなかったが、アメリカ・バプテスト派宣教医マッゴワン（D. J. McGowan）のもとで英語をまなぶ。おなじころ、長崎に来航したアメリカ監督派教会宣教師のウィリアムス（Channing Moore

Williams), アメリカ聖公会宣教師リギンス (John Liggins), ウォルシュ (R. J. Walsh), オランダ改革派教会宣教師フルベッキといった欧米人のもとでまなぶ機会にめぐまれ、英会話と英文読解にとりくむ。礼之は、義十郎とともに、みずから習得した清語と唐話を媒体として英語を習得することによって、文久3(1863)年7月に長崎奉行支配定役に抜擢され、幕府直轄の西欧語の教育施設である語学伝習所の頭取に登用される。

慶応元(1865)年のころ、礼之の家塾には、鹿児島藩の前田弘安(正名)、岸良俊之丞(兼養)、金沢藩の高峰讓吉、高知藩の萩原三圭、佐賀藩の山口範三(尚芳)、徳島藩の高橋(芳川)顕正など「塾生百数十名」、「塾外生二百名」がいた⁵⁹⁾。長義は、出崎後ほどなく何礼之の家塾をたずねるが、入門したのは岡田の家塾である。「初学」として「英学」をまなぶ長義は、礼之のすすめにより、岡田のもとで初級英語をまなぶことになる。

萩藩の伊藤博文は、慶応年間に10回ほど長崎をおとずれる。慶応3(1867)年10月に出崎したさいには、グラバーと「汽船一隻借入の契約」をむすぶ。鹿児島藩士吉村莊蔵と称し、11月下旬まで大徳寺の別坊に潜伏する。その間、何礼之の塾生であった高橋顕正を同宿させ、「読書の講修」をうける⁶⁰⁾。博文は、イギリス留学の経験もあり、「英語の會話は堪能」であったが、「読書力」は未熟であった。同時期、フルベッキも妻子とともに大徳寺境内に居住していた。「伊藤博文なども變名して(フルベッキに)入門したものである⁶¹⁾」といわれる。博文の伝記は、この点には言及しないが、博文がフルベッキと親交をむすんだり、教えをうけたとすれば、この2ヶ月ほどの長崎滞在中である。当時、周蔵も長崎にいた。長崎には、幕府の済美館を頂点とする実際のな外国語の教育・学習システムが構築されていた。

第3に、長崎遊学生は外国人居留地において条約締結諸国の人びとに接し、生きた外国語をまなぶことができる。安政条約にもとづき、安政6(1859)年6月、長崎でも自由貿易がはじまる。長崎奉行岡部長常は、同年7月に外国人居留地の建設に着手する。出島の西側の海岸部が埋め立てられ、南山手までの一帯が居留地になる。まず、イギリス、フランス、アメリカ、ポルトガルが領事館を開設し、商社が建設される。中国貿易において地位を確立していたジャーディン・マセソン商会(Jardine, Matheson & Co.), ウォルシュ・ホール商会(Walsh, Hall & Co.)などの規模の大きい商会だけでなく、グラバー商会(Glover & Co.), オルト商会(Alt & Co.)などの、東アジア貿易の実績のない中小規模の冒険商人もくわわる。当初からイギリス系商人が主導権をにぎる。

長崎居留地には、元治年間以降、つねに100人以上の欧米人が居住するようになる⁶²⁾。慶応3(1867)年6月には、「英」78人、「亜・米」31人、「仏」15人、「蘭」31人、「亨・独」12人、「葡」6人、「瑞」1人の居住者がいた。そのなかには、グラバー、オルト(William J. Alt), リンガー(Frederick Ringer)といった貿易商、フルベッキ、プチジャン(Bernard Petitjean), カズン(Jules Cousin)といった宣教師、ボードイン(Antonius Franciscus Bauduin), マン

スフェルト、シュミット (E. H. Schmid) といった医者もいた。イギリス、フランス、アメリカ、ポルトガル、プロイセン、デンマーク、オランダ、スイスは、東山手居留地に領事館をおく。金沢藩の高峰讓吉は、慶応元(1865)年、12歳のときに遊学生として長崎に派遣される。ポルトガル領事ロレイロ (José Loureiro) の家に寄寓し、「語學研究」に専念する⁶³⁾。のちにイギリス人貿易商オルトのもとでもまなぶ。熊本藩家老米田是容(長岡監物)の家臣であった井上毅も、慶応4(1868)年4月に長崎遊学を命じられ⁶⁴⁾、「廣運館及ヒ出嶋ノ外商佛人某等」のもとで「佛學」をまなぶ⁶⁵⁾。廣運館とは、新政府が旧幕府直轄の語学所である済美館を接收し、改称したものである。

周蔵は、出崎後ほどなく、居留地に住む「蘭医」や「英医」を訪ねる。周蔵がオランダ人医師やイギリス人医師をたずねたのは、みずから哀願する海外留学の妥当性について、「必也可_レ遠遊_レ也」、すなわち「医学をまなぶためには海外に留学すべきである」という言葉⁶⁶⁾をひきだすためである。しかし、海外に留学するためには、「書上之研究」としてのオランダ語ではなく、生きた外国語を習得しなければならない。

周蔵や勇記と同じころ、慶応3(1867)年4月に自費による長崎遊学を許可された児玉淳一郎、山本重助、今永順次なども、「英学」を修業する⁶⁷⁾。かれらは、長崎奉行が管轄する済美館はもとより、済美館の教授スタッフの家塾にかようこともできない。

萩藩は尊攘から倒幕へと転換する過程においてイギリスとの関係をふかめる。萩藩は、文久2(1862)年7月、木戸孝允、久坂玄瑞などの尊攘激派が主導し、藩論を「公武の一和」から、朝廷への絶対的な「忠節」を基調とする「破約攘夷」あるいは「即今攘夷」に急旋回する⁶⁸⁾。萩藩は、攘夷期日の文久3(1863)年5月に下関海峡を通過するアメリカ商船、フランス・オランダ軍艦を砲撃する。翌文久4(1864)年8月、イギリス海軍提督キューパー (Augustus Leopold Kuper) が指揮するイギリス、フランス、アメリカ、オランダの四カ国連合艦隊が下関を砲撃し、砲台を占拠する。萩藩は、講和談判の使者をおくり、旗艦ユーライアス (HMS Euryalus) においてキューパーとのあいだで停戦協定をむすぶ。停戦協定により、下関は実質的に「自由貿易港化」⁶⁹⁾される。実際に、講和後、下関には外国艦船が寄港するようになる。イギリスの新任公使パークス (Harry Smith Parkes) も横浜に赴任するさい、下関に寄港する。

萩藩は、文久3(1863)年8月からの一連の尊攘運動のために、あいついで重大な試練にまわれる。危機的状況のなかで、旧守派(「俗論派」)が藩権力を掌握し、幕府の要求をいれ、屈服する。元治元年12月、高杉晋作は亡命先から下関に潜入し、挙兵する。翌慶応元(1865)年1月に急進派は藩内の内戦で勝利し、旧守派政権から政権を奪還する。

急進派政権は、つぎのような考え方にたっていた⁷⁰⁾。

皇國の隆興を圖らんとせば、今後開國方針を取り萬國と交通を行ふの外なしと思はる。

但し大政の統一を内に定むるにあらざれば、國威を外に伸ぶるを得ず、因て我等は勤王倒幕の機運漸く熟せる目下の趨勢に乗じ、斷乎として防長の武力を擧げ、統一の大業を助成するの覺悟を固めざるべからず

萩藩は、藩論を「即今攘夷」から「開國方針」にきりかえ、「勤王倒幕」につきすすむ。藩論の轉換を可能にしたのが、イギリス系商会から仕入れた蒸気船と武器である。慶応元(1865)年10月、萩藩はグラバー商会から鹿児島藩の名義で大量の小銃と蒸気船ユニオン号(乙丑丸)を購入する。その後も、上海と下関のあいだを密貿易船が往来し、大量の武器・弾薬が萩藩に輸入される。高杉晋作は、慶応2(1867)年3月、グラバー商会の蒸気船に便乗し、長崎におもむく。長崎では、グラバー商会から「オテント」と呼ばれるイギリス製蒸気船を購入する⁷¹⁾。「オテント」は、丙寅丸と名づけられる。四境戦争に突入すると、イギリス系商会から仕入れた乙丑丸と丙寅丸という2隻の蒸気船と武器が威力を發揮する。

萩藩と駐日イギリス人のあいだには、近親感が生まれる。萩藩は、文久3(1863)年5月、ジャーディン・マセソン商会の支援により5人の藩士をイギリスに留学させる。慶応元(1865)年4月にも、萩藩は南貞助(高杉晋作義弟)と山崎小三郎を「兵學修業縣事情探索」のためにイギリスに送り出す⁷²⁾。イギリス系商会だけでなく、駐日イギリス外交団からも、なんらかの支援があったのであろう。なかでも駐日イギリス公使館の通訳官サトウ(Ernest Mason Satow)は、堪能な日本語を駆使し、倒幕勢力との幅ひろい接触をとおり豊富な情報を入力し、イギリスの駐日公使、とりわけパークスの対日政策の方向性を提示する。サトウにとっては、「薩摩人にせよ、長州人にせよ、われわれの行為に対して何ら恨みをいだく様子もなく、そのころから引き続いて生じた争乱と革命の幾年月の間、常に、我々の親しい盟友であった」⁷³⁾。

萩藩は、駐日イギリス外交団のたびかさなる好意に返礼する⁷⁴⁾。

河北遠藤等が長崎に赴くには屢々英船に便乗し四月には英人通譯官サトウに紅白縮緬五疋を長崎滞在英國コンスルに同三疋を其通譯官に同二疋を贈り同英人ホルムに同三疋を贈る皆我藩士の長崎に赴き海外の學を修むるに便宜を與ふるを謝せしなり

萩藩は、慶応3(1867)年4月に駐日イギリス公使館の通訳官サトウ、長崎駐劄イギリス領事ヴァイス(J. Howard Vyse)、その通訳官「英人ホルム」に「紅白縮緬」をおくる。それは、河北義次郎、遠藤謹助などが下関と長崎を往来するさいにイギリスの艦船に便乗するだけでなく、長崎において「海外の學」をまなぶために便宜をはかってもらった謝礼である。萩藩は、薩長連合をむすぶまえから、鹿児島藩の仲介によりイギリス人貿易商やイギリスの駐日外交団と接触していた。長崎に逗留する萩藩人は、萩藩が倒幕のためにつくりあげた在日イギリス人の人脈のなかで、異邦人に接し、生きた外国語をまなぶだけでなく、西欧の學術・文化にふれる。周蔵だけが在留イギリス人の人脈からはずれることはない。

周蔵は、留学先については、もともと「英行と決意」していた⁷⁵⁾。在日イギリス人グループは、萩藩に近親感をいだき、すでに萩藩からの留学生をうけいれていた。周蔵は、出崎後、医学研究の世界的動静をさぐる。オランダ、ドイツ、アメリカ、フランスが医学研究の先進国である。「醫者スレハ初ハ和蘭、后獨乙もどりに遊ベ英の龍動」⁷⁶⁾という着崎後20日ほどたったころの戯れ歌からうかがわれるとおりに、留学候補国は外交関係をふまえた選択である。幕府に協調的なフランスがはずれるが、オランダ、イギリス、ドイツが候補にはいる。

周蔵は、留学国としてプロイセンをえらび、藩庁に許可を願いで、慶応4(1868)年閏4月にプロイセンへの留学を命じられる⁷⁷⁾。長崎居留地には、クニッフラー商会(Kniffler & Co.)、シュルツェ・ライス商会(Schultze, Reis & Co.)、リンダウ商会(Lindau & Co.)などのドイツ系商社が設立され、ドイツ語圏から渡来したものもすくなくない。長崎ではドイツ語をまなんだであろうか。周蔵は、渡独後、ベルリン大学に学籍登録するまでの経緯について、つぎのように回想する⁷⁸⁾。

予ハ一方ニ於テ最モ力ヲ独逸語ノ研究ニ注キ比較的速ニ進歩シタルコトヲ覺リタルモ正則ノ修學規定トシテハ充分語学ニ通シ且高等中学ノ課程ヲ終ヘ始メテ専門学科ノ研究ニ移ルヘキナリ然レトモ予ノ短才ナル如何ニ努力スルモ到底独人ノ如ク正確ニ独逸語ヲ操リ独逸文ヲ綴ルコト能ハスト断定シ普通ノ讀書力ヲ有シ他人ノ言説ヲ解シ得ルニ至リタルヲ幸ヒ進テ大学ニ入ラント決心シ他人ノ忠告ヲ斥ケテ大學ニ入りタルハ実ニ明治三年(一千八百七十年)ノ春期ナリキ

周蔵は、萩原三圭とともに、プロイセン長崎名誉領事リンダウ(Richard Lindau)にとともになわれ、長崎を出航し、1869年5月(明治2年4月)にベルリンにたどりつく。この旅にはプロイセン海軍二等医官も同行していた。病魔におかされたリンダウに付き添っていたのであろう。ふたりは、リンダウの紹介により「『マース』と云小學校の教師」の下宿に住みこみ、「マース」のもとでドイツ語の学習に専念する⁷⁹⁾。おおくの人びとが参集するビアホールも「独逸語の会話の稽古」の場である。ふたりの下宿には、半年後に佐藤進がくわわる。3人の日本人留学生は、はじめは「滞在中は同様不怠研究罷在此語一兩月も相学び候へば此れ迄和蘭相学びし力にも平均可仕候」と考えていたが、やがて「学問の盛なる事は可驚事にて本邦抔より突然出掛れば初学の者のアベセより習ひ始めし釣合にては中々早速自分の本業に取掛る訳けにも相成兼候」と思うようになる⁸⁰⁾。

渡独の途上、ドイツ語を母語とするリンダウや海軍医官にドイツ語をならう機会があったとしても、初歩的な会話程度であったであろう。体系的にドイツ語を習得しはじめるのは、プロイセンにたどりついたのちのことである。周蔵は、長崎ではドイツ語をまなっていない。三圭や進と同様に、ドイツ語の学習歴はない。ベルリンでは、「アベセ」、すなわちドイツ語のアルファベットからなまばなければならない。

ベルリンにたどりつくと、周蔵は、さっそく「字國ノ一中佐」や「当時外務省ニ奉職シ後累進シテ外務省ノ局長兼次官トナリシ友人某」と親交をむすぶ。医学志望の三圭は、佐藤進とともに日本から同行したプロイセン海軍二等医官の案内でベルリン大学医学部を訪れ、「解剖室」、「大病院」などを見学する⁸¹⁾。周蔵や三圭が渡独の途上からベルリン到着後までドイツ人と意思の疎通をはかるとすれば、英語によってである。プロイセンの中等教育は、19世紀中葉以降、古典語にかわり、近代語、とりわけ英語に重点がおかれるようになる⁸²⁾。周蔵や三圭が面談した人びとは中等教育を卒えていた。

3人がベルリンで「独逸語ノ研究」に専念することにより「比較的速ニ進歩シ」、「普通ノ読書力」が身につく、「他人ノ言説」を理解することができるようになったのは、偶然ではない。オランダ語は、ドイツ語や英語の共通のゲルマン祖語から生まれた言語である。神聖ローマ帝国では、聖俗の諸侯が割拠する。ドイツ語が通用するが、標準的なドイツ語は存在せず、北部には低地ドイツ語 (niederdeutsch)、南部には高地ドイツ語 (hochdeutsch) という方言があった。高地ドイツ語が、標準ドイツ語の基盤になる。神聖ローマ帝国の北部の7地域は、1588年に分離独立し、ニーダーラント連邦共和国、すなわちオランダが生まれる。独立国家への道程において、低地ドイツ語から独自の共通語、すなわちオランダ語が形成される⁸³⁾。「阿蘭陀語」は、オランダ語では“nerderduitsch”，すなわち低地ドイツ語である⁸⁴⁾。

大坂の適塾にいた福沢諭吉は、安政5(1858)年に大坂から江戸にまねかれ、築地鉄砲洲の中津藩中屋敷でオランダ語をおしえる。翌安政6(1859)年に開港後間もない横浜をたずねるが、「一寸とも言葉が通じない」だけでなく、「店の看板も読めなければ、ビンの貼紙もわからぬ」。諭吉は、「この後は英語が必要になるに違いない」と考え、独学で英語をまなぶ。諭吉は、英語に転向したことについてつぎのように述べる⁸⁵⁾。

真実に蘭学を捨ててしまい、数年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違いの話で、実際を見れば蘭といひ英といひも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭書読む力はおのずから英書にも適用して、決して無益でない。

オランダ通詞だけでなく、蘭学者と呼ばれる人びとは、インド・ヨーロッパ語に属するオランダ語を媒介として、英語、フランス語、ドイツ語を習得する。周蔵は、長崎ではオランダ語を媒介として英語をまなぶ。

IV. 「諸學術」の修業

徳島藩侍医の嫡子長井長義は、周蔵と同様、「醫者嫌ヒ」の長崎遊学生であった。長義は、慶応2(1866)年に徳島藩の藩費留学生にえられる。藩主から「好みの學科を選べ、醫者であるから必ずしも醫學を修めねばならぬとは言はぬ」といわれていた⁸⁶⁾。長義は、長崎では精得館に附設される分析究理所のハラタマ (Koenraad Wolter Gratama) のもとで「舎密學」

をまなぶつもりであった⁸⁷⁾。長義は、慶応 2 (1866)年12月18日に長崎にたどりつき、20日には上野彦馬をたずね、「入塾の約定す」。上野彦馬をたずねたのは、ハラタマが長崎にいなかったからである。ハラタマは、任期満了をひかえたボードインが長崎奉行に提示していた分析究理所の江戸移転、すなわちハラタマの江戸転任の構想が具体化したために、慶応 2 (1866)年 7 月、江戸に旅だつ。ハラタマは、一時、長崎にもどるが、慶応 3 (1867)年 1 月には幕府伝習生の戸塚文海と佐倉順天堂創始者佐藤泰然の養子尚中の帰府に同行する。長義は、かれらの送別会に参会する。

翌慶応 3 (1867)年 1 月、長義は「約定」どおり新大工町の上野彦馬の居宅に移り住む。それは、日常的に「舎密」の研究にたずさわるためである。彦馬は、天保 9 (1838)年に「写真術の開祖」上野俊之丞の 4 男として長崎に生まれる。豊後日田の咸宜園で漢学をおさめたのち、長崎にもどり、通詞名村八右衛門からオランダ語をまなぶ。第二次海軍伝習の指揮官カッテンディーケ (Ridder Huijssen van Kattendijke) と一等士官トローイエン (Van Trojen) のもとで「砲術」を修業する。万延元(1864)年に「親シクポンペー氏ニ接シ業ヲ受ク」⁸⁸⁾。「舎密ノ學」をまなぶのは、「砲術」と、父親からうけついで「煙硝」と「長崎更紗」の製造のために必要であるからである。彦馬は、ポンペのもとでの修行中に「寫眞術」にであい、各地を遊歴したのち、文久 2 (1862)年に長崎に「上野撮影局」を開設する。

長義の日課には、上野彦馬による「開宗」、すなわち宇田川榕庵が訳述した『舎密開宗』の講釈、「硫酸製煉」などの実験がくわわり、長義は、彦馬の助手として、実験に明け暮れる。『舎密開宗』は、オランダ人医学者イペイ (Adolf Ypey) が1803年に刊行した『依氏舎密』(Chemie voor Beginnende Liefhebbers) に依拠し、オランダ語の諸書を参看しながら訳述したものである。『依氏舎密』の原典は「^{アンゲリア}暗危利亜人。徳^デ・^{ウィルリウム}微爾里語^{ヘンリー}賢理氏ノ著述」、すなわちイギリス人医師・化学者のヘンリー (William Henry) が1801年に刊行した『化学概説』(An Epitome of Experimental Chemistry) である⁸⁹⁾。ヘンリーの『化学概説』は「^{ドイツランド}獨乙蘭土^{エルヒユルト}會爾扶尔多府ノ舎密家。伊^イ・蒲^フ・篤隆母斯獨扶尔弗氏。」によってドイツ語に翻訳増補される。トロムスドルフ (Johann Bartholomäus Trommsdorff) は、化学を薬学の基礎科学として薬化学的研究にたずさわった化学者である⁹⁰⁾。『化学概説』ドイツ語版は、「和蘭ノ醫學教頭。兼舎密教論^{アルフスィーベ}亜尔布斯依百氏」によってオランダ語に訳される⁹¹⁾。長義は、『舎密開宗』の「序」から原著者がイギリス人のヘンリーであることを知っていた。原著を繙読しようとすれば、英語を習得しなければならない。

長義は、やがて精得館から足が遠のき、慶応 3 (1867)年 6 月には徳島藩遊学生を取り締まりである村瀬喜四郎に詰問される。精得館から「何故に先達より出勤無_レ之候哉」と問い合わせがあったからである。長義は、村瀬喜四郎に委細を説明し、「舎密并英学共門に入候迄、病院の方間方ニ致度奉存候」⁹²⁾と願いでる。長義は、精得館での修学よりも「初学」である

「舎密」と「英学」を優先することになる。長義は、「舎密」と「英学」に接近すればするだけ、精得館から足がとのおのき、オランダ語学習のための「文典」からとおぞかる。長義は、父琳章から藩医職をつぐことを期待されていたが、医業になじめない。父のもとから遠くはなれた長崎では、長義は「舎密」に没頭する。長義の化学者としてのキャリアは、幕末期の長崎においてはじまる。

青木周蔵は、長井長義のように、明確な像をむすんでいなかったとしても、やがて実現するであろう海外留学にそなえ、長崎でなにかにとりくんでいた。長崎にたどりついた慶応3（1867）年6月から、時間を1年半ほど先送りしてみよう。周蔵が、明治2年4月（1869年5月）にベルリンに到着し、8ヶ月ほどたったころである。周蔵は、木戸孝允宛に書簡⁹³⁾をおくり、新聞に記載された「仏国」、「英」、「北独乙合衆国」、「魯国」、「伊利亚」の政治情勢を報告する。「モナルヒー貴族惣／裁の義」、「レブルチオン内乱／の義」といった、当時の日本にはない政治学の術語の概念もじゅうぶんに会得している。この書簡では「大学校入門」に言及する。周蔵は、萩藩好生堂の先生であったとき、大村益次郎の命により『『セバストポール』戦争ノ顛末ヲ叙述シタルモノ』の「序文」を読解し、オランダ語により「軍事及ヒ政治思想ノ一斑」にふれたことがある。しかし、萩城下では日常的にそうした国際情勢に接することはない。

もう少し時間を先送りしてみよう。周蔵は、1872(明治5)年8月18日、旧萩藩出身の品川弥次郎、桂太郎などのドイツ留学生とともにロンドンに萩藩閥の総帥である木戸孝允をたずね、2週間あまり滞在する。孝允は、「此行方先各國の根本とする處の律法且政府の組み建等」⁹⁴⁾の調査研究を欧米歴訪中の岩倉使節副使としての最大の課題と位置づけていた。周蔵は、孝允のもとにに応じ、イギリス、フランス、プロイセンの憲法について論じる。前年には、プロイセン国王を世襲の皇帝とするドイツ帝国が誕生し、ドイツ帝国憲法が制定されていたが、周蔵はドイツ帝国憲法を「孛国の欽定『コンスチューション』」と呼ぶ。

周蔵は、1870(明治3)年冬学期にベルリン大学法学部に学籍登録する。ドイツ諸領邦では、大学に学籍登録するさいには、ギムナジウム卒業試験(Abitur)をうけ、習熟証(Reifezeugniß)を提示しなければならないが、プロイセンの諸大学では、非プロイセン人のばあいには、ギムナジウム卒業試験制度を導入していない諸邦が少なくないという実態をふまえ、柔軟な対応策が講じられ、学籍登録委員会の裁量に委ねられる。外国人も、プロイセン邦外の出身者と同様に習熟証の提示を免除される⁹⁵⁾。この例外規定により、同学期に佐藤進と萩原三圭もベルリン大学医学部に学籍登録する。

周蔵は、まず「一国ノ基本法」である憲法の講義を聴講し、1871年冬学期には行政法を聴講する。行政法を担当していたのが、グナイスト(Heinrich Rudolf Hermann Friedrich von Gneist)である。グナイストは、ベルリン大学法学部正教授(ordinarius)としてローマ法お

よびドイツ国家・行政法（Römisches Recht und deutsches Staats- und Verwaltungsrecht）を講じる⁹⁶⁾。周蔵が大学で聴講するためにドイツ語をまなびはじめてから、2年あまりしかたっていない。「努力スルモ到底独人ノ如ク正確ニ独逸語ヲ操リ独逸文ヲ綴ルコト能ハス」という自覚もある⁹⁷⁾。しかも、ドイツにおいて「高等中学ノ課程」を卒えていない。周蔵は、ドイツ人学生のように基礎的教養を身につけていない。周蔵と同期の大学東校留学生のなかには、北尾次郎のように、ドイツ語を習得したうえで「高等中学ノ課程」にすすみ、卒業後、「専門学科ノ研究」にすすむものいた。周蔵は、ドイツ語というインド・ヨーロッパ語族に属する外国語で講じられ、西欧の学問体系に属する法学という「専門学科」の講義を理解することができたであろうか。

周蔵は、「李国の欽定『コンスチテューション』」をめぐる知見を木戸孝允に披瀝する。

プロイセンは、オーストリアと同様に憲法も国民代表機関としての議会ももたず、絶対主義的な統治体制を固持してきた。しかし、パリで起こった1848年の二月革命の余波は、ドイツ各地にもおよび、市民・労働者の強硬な要求に譲歩し、自由主義的な「三月内閣」が成立する。5月には、ベルリンにおいて憲法制定国民議会が開催される。しかし、議会が憲法草案を議論しているあいだに反動勢力が息を吹き返し、12月には議会が解散させられ、プロイセン憲法が欽定される。この欽定憲法は、三級選挙法によって選挙された保守的な議会において手直しされ、1850年2月にプロイセン国王が憲法遵守の宣誓をおこない、「立憲国家の一つの独特の形態」である立憲君主制が成立する⁹⁸⁾。

プロイセンでは、1850年代から1860年代にかけて、重工業を中心として工業化が飛躍的にすすみ、ドイツ関税同盟における主導権をいっそう強める。1862年には、ユンカー出身の保守主義政治家ビスマルク（Otto Eduard Leopold Fürst von Bismarck）が首相に任命され、その鉄血政策のもとで軍事力が増強され、1864年にはシュレスウィヒ・ホルシュタイン問題でデンマークを、1866年には普墺戦争でオーストリアをやぶる。翌1867年には、プロイセンはライン川以北の22のドイツ諸邦とともに北ドイツ連邦を組織し、北ドイツ連邦憲法が発布される。連邦首長にはプロイセン王ヴィルヘルム（Wilhelm）一世がつき、宰相にはプロイセン首相ビスマルクが就任する。さらに攻守同盟と関税同盟によって南ドイツ諸邦を軍事的・経済的に結びつけ、オーストリアを除外したドイツ統一の基本レールが敷かれる。

ドイツにおいては、プロイセンのヘゲモニーのもとで強大な統一国家が誕生しようとしていた。フランス皇帝ナポレオン三世（Charles Louis-Napoléon Bonaparte）は、隣国ドイツの大国化を恐れ、干渉と妨害を繰り返す。ビスマルクの挑発により、1870年7月にフランスが宣戦布告し、両国間に戦端が開かれる。南ドイツ諸邦軍も参戦するプロイセン・ドイツ軍は連戦連勝し、9月にナポレオン三世をフランス北東セダンにおいて包囲・降伏させる。普仏戦争のさなかの1871年1月、パリ西南郊のヴェルサイユ宮殿における王の皇帝戴冠によって

ドイツ帝国が誕生する。北ドイツ連邦が南ドイツ諸邦を吸収合併し、憲法も北ドイツ連邦憲法に若干の名称変更と補正をくわえただけでドイツ帝国憲法となる。ドイツ帝国憲法は、「李国の欽定『コンスチューション』」、すなわちプロイセン欽定憲法の基本構造を継承したものである。周蔵は、こうした経緯をふまえ、ドイツ帝国憲法をプロイセン欽定憲法と呼ぶ。

周蔵は、イギリス、フランスの憲法の特徴を要約する。フランスの憲法については、つぎのように述べる⁹⁹⁾。

彼等（佛人）ハ嚮キニ「自由」「同權」「一國兄弟主義」ノ三要綱ヲ提ケテ歸趨ニ迷ヒタル末終ニ彼ノ大革命ヲ誘致シテ社会ノ秩序ヲ破壊シタリシカ其ノ反動トシテ那翁一世其ノ國ニ帝タルニ至リテハ頓ニ專制政治ヲ現出セリ尋テ那翁ノ失敗スルヤ「コンスチューション」制定ノ急ヲ唱フルモノ益々多ク終ニ第十九世紀ノ上半ニ於テ一種誤謬ノ主義ヲ以テ構成セル「コンスチューション」ヲ制定セリ

プロイセンは、パリ二月革命の余波により「コンスチューション」を制定するが、「佛国ノ浅薄ナル思想」を嫌忌し、「人民ノ干渉」を排し、「欽定『コンスチューション』」を制定する。プロイセン国民は、「行政及ヒ經濟ニ関シ多大ナル自由及ヒ一定ノ權利ヲ享受シタ」ために、欽定憲法に「不満ノ意」をしめさない。

周蔵の憲法論については、自伝から引用した。自伝は、現在から往事をふりかえるために、自伝の記述が、当時の周蔵が実際に説明した内容であったか否かさだかではない。しかし、孝允が、周蔵がかたる「李国ノ欽定『コンスチューション』」に関心をしめたのはたしかである。孝允は、「他日柏林ニ遊フノ日足下ヲ勞シテ李国ノ『コンスチューション』ヲ学ハン」と告げ、翌1873年4月、ベルリンをおとづれる。周蔵は、ドイツ帝国憲法を「翻譯」しただけでなく、孝允を案内し、グナイストを訪問する。孝允は、アメリカ、フランスでも行政法学者と面談しているが、グナイストをたずねたのは、いわゆるプロイセン欽定憲法における立憲君主制の理論的根拠をたずねたいからである。孝允とグナイストとの会談において通訳をつとめるものは周蔵のほかにはない。孝允は、周蔵に「我國ノ事情形勢ヲ顧慮シ併セテ李国ノ憲法ヲ參酌シテ一篇ノ草案」を作成するよう命じる。孝允がみずから憲法構想を練りあげるためには、グナイスト憲法論を祖述することができる周蔵の手助けが不可欠であるからである。

周蔵は、長崎へ出てから5年、ベルリンにたどりついてから6年ほどのちには、ドイツ語で講じられ、西欧の学問体系に属する法学という「専門学科」の講義を理解する。周蔵は、明治5（1872）年8月には、「国人にして独逸語に通じ、及其国体風習等を熟知する者」¹⁰⁰⁾として自他ともにみとめる存在になる。翌年1月には、ベルリン駐箚の外務一等書記官心得に任官する。

長崎には、開港後、居留地がつくられ、条約締結国の貿易商が居住し、商機をうかがって

いた。長崎と上海のあいだに定期航路がひらかれ、「歐米各國の事情及び世界の大勢」を把握することができる¹⁰¹⁾。周蔵の国際情勢や欧米の政治情勢への関心は、長崎という国際都市において、異邦人、とりわけイギリス人との交接を契機としてひらかれたということができる。

おわりに

青木周蔵は、長崎における足跡について多くを語ろうとしない。その自伝や書簡などから読みとれるのは、周蔵が西洋医学を修学していたということだけである。本稿では、周蔵の空白の長崎時代を再構成しようところろみた。慶応3(1867)年6月から1年あまりの長崎滞在中の周蔵の足跡についてまとめておきたい。

第1に、周蔵は長崎滞在中は西洋医学をまなばざるをえない。それは、ふたつの理由による。ひとつは、萩藩医療行政を統括する青木研蔵の養子にむかえられ、いずれ藩医の地位を世襲しなければならなかったからである。周蔵が幾人かの候補者のなかから青木家の養子にむかえられたのは、藩医や医者としての適性があったからではなく、オランダ語の読解力がひいでていたからである。宇田川・坪井の学統をうけつぐ適塾では、難解なオランダ語のテキストを解読することが塾頭になる条件であったことを想起されたい。研蔵は、やがて周蔵が「稟賦ノ醫者嫌ヒ」であることに気づく。長崎に旅だつさい、養父研蔵から「変業セザル可シ」と諭される¹⁰²⁾。

もうひとつは、萩藩医師団の推薦により海外留学候補者として長崎に派遣されたからである。養祖父周弼が西洋医学学校へと育てあげた萩藩医学学校好生堂は、西洋医学の新しい息吹がもたらされないまま周弼の実弟の研蔵にひきつがれ、萩藩医団が「吾道ノ堆廢セル」こと、すなわち好生堂における医学の停滞を認識するほどに停顿していた。周蔵に課された課題は、萩藩における西洋医学の再興という役割である。周蔵はもとより、萩藩医団の視線は海外にむけられていた。周蔵にこうした役割がゆだねられたのは、周蔵に語学の才があるからである。饒舌の周蔵が長崎において寡黙にならざるを得ないのは、医学遊学生として長崎に派遣されながら、西洋医学の修業に専念することがなかったからである。

周蔵は、はじめの半年は大村藩医の長与専斎のもとで精得館のマンズフェルトが講じる西洋医学をまなび、その後、渡独の途につくまでは、精得館に出入りし、マンズフェルトの授業もうける。ポンペ、ボードイン、マンズフェルトへと受け継がれた西洋医学は、萩藩好生堂でまなんだ西洋医学とは異質のものである。その西洋医学は、「摘句尋章の舊習」を脱し、「きわめて平易なる言語即文章」によって「事實の正味」を把握しようとするものである。臨床という医学の現場を正視する医学である。好生堂は、宇田川・坪井の学統を継承し、原典主義と翻訳主義をよりどころにする。伝統的な漢方医学から脱却するために、「空論鑿説」を排し、「実学実験」をめざす¹⁰³⁾が、原典主義と翻訳主義は「摘句尋章の舊習」を蘇生させ、

あらたに空理虚談を生みだす可能性をはらむ。実際、好生堂の医学は西洋医学のあらたな息吹を吸収することなく、「堆廢」が認識されるほどに臨床現場からかけはなえていた。旺盛な知的探求心をもつ周蔵が長崎における西洋医学の修業によって得たものがあるとすれば、西洋の学術・技術が現実社会に密着したものであることを認識したことであろう。

第2に、語学の才にめぐまれた周蔵は長崎において、生きた外国語をまなぶ。周蔵が萩城下においてまなんだオランダ語は読み言葉としての外国語である。ある程度、オランダ語を判読することはできるようになったであろうが、欧米諸国の人びとのあいだで通じる言語、話し言葉、書き言葉としての外国語をまなんだ経験はない。萩藩は、討幕運動のためにイギリス系商会の人びとと交渉をもつようになっただけでなく、下関砲撃事件を契機として萩藩に近親観をいただくようになった駐日イギリス外交団ともむすびつきをつよめる。イギリス人グループは、慶応3（1867）年夏頃には実質的に自由港化された下関に寄港するイギリス艦船に萩藩人を便乗させ、長崎とのあいだを往来したり、長崎では萩藩人が「海外の學」をまなぶために便宜をはかる。周蔵も、しばしば長崎に潜入する萩藩の人びととおなじように、長崎においてイギリス人グループの支援をうけただけでなく、居留地で「海外の學」、すなわちイギリス人が読み、書き、喋る英語をまなぶ機会にめぐまれる。

第3に、周蔵は長崎において国際情勢や欧米の政治情勢に関心をいただくようになる。周蔵は、居留地に入出入りし、「海外の學」をまなぶ。「海外の學」は、はじめは言語としての英語にはほかならなかった。周蔵が接するイギリス外交団の人びとやイギリス系商会の人びとは、職業柄、国際情勢や各国の動向につうじる。周蔵が日常的に外國人に接したり、「医学トハ全く没交渉ノモノ」を繙読したりし、国際情勢や欧米の政治情勢に関心をいただくようになるのは、長崎におもむいたのちのことである。

周蔵は、実父三浦玄仲のもとで医者としての修業をはじめたころ、「国家ニ益スル學問即チ政治ニ関係アル學問ヲ修メ漸次政治ニ參與スヘキ位置ヲ得ントスル感念模糊トシテ腦中ニ生セリ」¹⁰⁴⁾と追懐する。「政治ニ関係アル學問」という発想の萌芽は、封建的な世襲制の土壤においてではなく、西欧に邂逅した長崎において胚胎する。周蔵は、ベルリン到着後1年にもみたくない時期に、ヨーロッパの国際情勢に関する新聞記事を熟読玩味し、さらに、ベルリン到着後3年にもみたくない時期には、ベルリン大学法学部で聴講した憲法や行政法の講義の内容を自家薬籠におさめる。周蔵という一個の才能が、みじかい年月にもかかわらず、ドイツ語という言語の障壁、基礎的教養の欠如を超克することを可能にする。しかし、その前提には、長崎という舞台、長崎というスプリングボードが不可欠であった。国際情勢や欧米の政治情勢を熟視し、分析する視点は、西洋医学の軛からときはなされた長崎において獲得されたと考えることができる。長崎という国際都市において、異邦人、とりわけイギリス人との交接を契機として外交や政治に関心をいただくようになる。周蔵の外交官・政治家としてのキャリアは、

幕末期の長崎においてはじまる。

周蔵のグナイストゆずりの憲法論は、萩藩閥の総帥である木戸孝允の没後、いわゆるドイツ・コネクションに継承され、明治十四年政変への潮流をつくりだす。その基調にあるのは、「建國の大法はデスポチツクに無之ては相立申間敷」という考え方である¹⁰⁵⁾。

【註】

- 1) 一坂太郎・蔵本朋依、『久保松太郎日記』、マツノ書店、平成16年、654頁。
- 2) 『忠正公伝』第21編、第7章 長藩士の洋行、「両公伝史料」、山口県文書館所蔵。
- 3) 末松謙澄、『防長回天史』第五編下、九、末松晴彦、大正10年修訂再版（マツノ書店、平成3年復刻）、324頁。
- 4) 『青木周蔵筆記』、「青木周蔵関係文書」、国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- 5) 管見によれば、長崎滞在中、青木周蔵が書きおくれた書簡は下記のとおりである。
 1. 慶応3年6月28日付、青木周蔵書簡、日野宗春宛、「日野家文書」、「諸家文書」
 2. (慶応3年)7月18日付、薩埴大嶋洋一(青木周蔵)書翰、竹田裕伯・日野宗春宛、「日野家文書」、「諸家文書」
 3. 「野稿一章」、青木周蔵上書、木戸執事宛、丁卯季夏、「諸家文書」
 4. 慶応3年8月18日付、(青木)周蔵書簡、日野宗春宛、「日野家文書」
 5. 慶応3年10月12日付、(青木)周蔵書簡、日野宗春宛、「日野家文書」
 6. 慶応4年1月9日付、(青木)周蔵書簡、日野宗春宛、「日野家文書」

『木戸孝允関係文書』(木戸孝允関係文書研究会編、『木戸孝允関係文書』第1巻、東京大学出版会、2005年)にも、長崎滞在中の書簡がおさめられている。

慶応(4)年1月19日付、青木誠書簡、木戸孝允宛

慶応(4)年2月10日、青木誠書簡、木戸孝允宛
- 6) 長崎市役所、『増補長崎略史』(『長崎叢書』下)、原書房、昭和48年(大正15年初版)、386頁。
- 7) 福田忠昭著刊、『振遠隊』、大正7年、29頁。
- 8) 「撤兵隊」、卯九月(慶応3年)、森永種夫校訂、『長崎幕末史料大成』五、長崎文献社、昭和46年、436頁。
- 9) 益田右衛門介・福原越後・国司信濃連署、「朝廷への上書」、元治元年7月18日付、『防長回天史』第四編上、六、412頁。
- 10) 「長藩士并荷物海邊着船ノ榮可繫留旨触書」、元治元年8月24日、石井良助編、『徳川禁令考』前集第二、創文社、昭和34年、107頁。
- 11) 「毛利大膳父子叛逆ニ付武器其外米穀等長防兩國へ差留ノ儀諸藩へ触書」、元治元年8月26日、同上。
- 12) 『増補長崎略史』、376頁。
- 13) 末松謙澄、『防長回天史』第五編中、八、末松春彦、134～135頁。
- 14) 田中彰、『幕末維新史の研究』、吉川弘文館、1996年、180頁。
- 15) 「長防攻圍人數引揚之趣諸向へ達書」、慶応2年9月29日、『徳川禁令考』前集第二、129頁。
- 16) 遠藤謹助書翰、木戸孝允宛、慶応3年3月14日付、『防長回天史』第五編下、九、323頁。
- 17) 毛利筑前・毛利出雲書翰、桂右衛門・島津伊勢宛、慶応3年4月、『忠正公伝』第20編、第7章。
- 18) 応答者デ、ビー、グラバ、質問者中原邦平、「長薩英の關係」、『防長史談会雑誌』第27号、明治45年2月、53頁。
- 19) 毛利筑前・毛利出雲書翰、江頭準之助宛、慶応3年4月、『忠正公伝』第20編、第7章。
- 20) 「大村純熙」、足立栗園、『近世日本国防論』下巻、三教書院、昭和15年、443頁。
- 21) 『防長回天史』第五編下、九、113頁。
- 22) 『忠正公伝』第20編。
- 23) 青木周蔵上書、木戸執事宛、丁卯季夏、「諸家文書」。
- 24) 「二世坪井信道伝」、「諸臣履歴」、「毛利家文庫」、山口県文書館所蔵。傍線部割注、斜線改行。
- 25) 田中助一、『防長医学史』下巻、防長医学史刊行後援会、昭和28年(聚海書林、昭和59年復刻)、19～29

- 頁。
- 26) 『忠正公伝』第21編，第7章。
 - 27) 長与専斎，長与称吉編，『松香私志』上卷，明治35年，30～31頁。傍線部割注，斜線改行。
 - 28) 「瓊浦日抄」慶応丁卯，徳島大学薬学部長井長義資料委員会，『改訂長井長義長崎日記』，徳島大学薬友会出版部，2003年，95頁。本書は，徳島大学薬学部長井長義資料委員会の渋谷雅之教授に寄贈していただいた。
 - 29) 『久保松太郎日記』，648～651頁。
 - 30) 日本史籍協会編，『木戸孝允日記』一，東京大学出版会，昭和42年（昭和7年初版），42頁。
 - 31) 「日野家文書」。傍線は割注部分。
 - 32) 青木周蔵書簡，日野宗春宛，慶応3年6月28日付，「日野家文書」。
 - 33) 池田謙斎口述，医海時報社員筆記，『回顧録』，入沢達吉，大正6年，32頁。
 - 34) 相良翁口述，社員筆記，「相良翁懷舊譚」14，『醫海時報』第518号，明治37年5月，376頁。相良知安の5代目のご子孫である相良隆弘氏に「相良翁懷舊譚」復刻版をご恵投いただいた。
 - 35) 池田謙斎，『回顧録』，27頁。
 - 36) 同上書，31頁。
 - 37) 「野稿一章」，青木周蔵上書，木戸執事宛，丁卯季夏。
 - 38) 「部寄」文久四年元治元年，「毛利家文庫」。
 - 39) 池田謙斎，『回顧録』，10～11頁。
 - 40) 長与専斎，長与称吉編刊，『松香私志』上卷，明治35年，19～20頁。
 - 41) 池田謙斎，『回顧録』，10～11頁。
 - 42) 石田純郎，『蘭学の背景』，思文閣出版，1988年，148～151頁。
 - 43) 「醫學修業規則」，「医業成立沙汰控」，「毛利家文庫」。「醫學所規則」，「好生堂医学引痘沙汰控」，「毛利家文庫」。
 - 44) 池田謙斎，『回顧録』，23～24頁。
 - 45) 同上書，27頁。
 - 46) 同上書，25頁。
 - 47) 『防長医学史』上卷，249頁。
 - 48) 『忠正公伝』第21編，第7章，「両公伝史料」。
 - 49) 長井長義，「日本最初の写真師」，東京朝日新聞社編輯，『写真百年祭記念号』，東京朝日新聞社，大正14年，3頁。
 - 50) 「瓊浦日抄」慶応丁卯，徳島大学薬学部長井長義資料委員会，『長井長義長崎日記』改訂版，徳島大学薬友会出版部，2003年，41頁。
 - 51) 「瓊浦日抄」註，32頁。倉沢剛，『幕末教育史の研究』一，講談社，平成6年（昭和58年第1刷），559頁。
 - 52) 「オランダ通詞養成急務」，卯一二月（安政2年），森永種夫校訂，『長崎幕末史料大成』三，長崎文献社，昭和45年，146～147頁。
 - 53) 古賀十二郎，『長崎洋学史』上卷，長崎文献社，昭和48年（昭和41年初版），200頁。
 - 54) 同上書，119～120頁。
 - 55) 大沢謙二，『燈影虫語』，東京大学生理学同窓会編，1979年（杏林舎，昭和3年初版），28頁。
 - 56) 「開成所事務」起安政六年己未慶応三年丁卯，東京大学史料編纂所所蔵。
 - 57) 高谷道男訳，『フルベッキ書簡集』，新教出版社，2007年，125頁。
 - 58) 許海華，「長崎唐通事何礼之の英語習得」，『関西大学東西学術研究所紀要』第44号，2011年4月，306頁。
 - 59) 大久保利謙，「幕末英学史上における何礼之一とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流」，鹿児島県立短期大学『研究年報』6，1987年3月，33頁。
 - 60) 春猷公追頌会編刊，『伊藤博文伝』上卷，昭和15年，315頁。
 - 61) 鈴木要吉，『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』，東京医事新誌局，昭和8年，48頁。
 - 62) 「長崎居留地における国別人数」，長崎県立長崎図書館編刊，『長崎居留地外国人名簿』Ⅲ，平成16年，360～361頁。本資料は長崎県立長崎図書館から広島修道大学図書館に寄贈されたものである。あらためてお礼を申しあげる。
 - 63) 橋爪恵編，『巨人高峰博士』，生熊関三郎，昭和6年，6頁。
 - 64) 「遊学一卷帳」慶應元年ヨリ明治三年迄，『永青文庫』，熊本大学附属図書館所蔵。

- 65) 「渡正元」, 杉本勝二郎編, 『國乃礎』後編上編, 國乃礎編集部, 明治27年, 81頁。
- 66) 青木周蔵書簡, 日野宗春宛, 慶応3年6月28日付, 「日野家文書」。
- 67) 「他國修業」, 『忠正公伝』第21編。
- 68) 『防長回天史』第三編上, 三, 316~318頁。
- 69) 野口武彦, 『長州戦争』, 中央公論新社, 2006年, 78頁。
- 70) 『伊藤博文伝』上巻, 202頁。
- 71) 『防長回天史』第五編下, 九, 222頁。
- 72) 『防長回天史』第五編上, 七, 126頁。
- 73) アーネスト・サトウ, 坂田精一訳, 『一外交官の見た明治維新』上, 岩波書店, 2002年(1960年第1刷), 159頁。
- 74) 『修訂防長回天史』第五編下, 九, 324頁。
- 75) 慶応3年7月18日付, 薩嘉大嶋洋一(青木周蔵)書簡, 竹田裕伯・日野宗春宛, 「日野家文書」。
- 76) 同上。
- 77) 明治元年閏4月9日付, 「洋学則」, 「毛利家文庫」。
- 78) 筆記第二。
- 79) 佐藤進, 「渡洋之記三」, 明治2年9月11日付, 『餐霞録』, 147頁。
- 80) 佐藤進差出, 岡本道庵宛, 明治3年1月6日(1870年2月6日)付, 「資料一(手紙)」, 順天堂大学編刊, 『順天堂史』上巻, 昭和55年, 1036~1037頁。
- 81) 「渡洋之記四」, 「第四篇 佐藤進先生事蹟(三)」, 松本本松, 「順天堂百五十年史」12, 『東京医事新誌』第74巻第7号, 昭和32年7月, 48頁。
- 82) 望田幸男編, 『近代ドイツの専門職』, 晃洋書房, 1993年, 148頁。
- 83) ヨアヒム・シルト著, 橘好碩訳, 『ドイツ語の歴史』, 大修館書店, 1999年, 139頁。
- 84) F. Halma 原著, Hendrik Doeff 編著, 吉雄権之助他訳, 『道訳法兒馬』, 坪井信道写, 書写年不明, 文化13年序の写本, 早稲田大学図書館所蔵。
- 85) 福沢諭吉, 富田正文校訂, 『福翁自伝』, 岩波書店, 1978年, 104頁。
- 86) 長井長義, 「日本最初の写真師」, 東京朝日新聞社編輯, 『写真百年祭記念号』, 東京朝日新聞社, 大正14年12月, 3頁。
- 87) 同上, 3~4頁。
- 88) 島田耕一, 「故上野彦馬君略伝」, 『薬学雑誌』第269号, 599~601頁。
- 89) 「序」, 賢利原著, 宇田川榕菴重訳増註, 『舎密開宗』内・外篇, 青藜閣, 天保8(1837)年序, 早稲田大学図書館所蔵。
- 90) 坂口正男, 「舎密開宗攷」, 田中実・坂口正男・道家達将・菊池俊彦, 『舎密開宗研究』, 講談社, 1975年, 19頁。
- 91) 同上書, 5頁。
- 92) 『改訂版長井長義長崎日記』, 78頁。
- 93) 明治2年11月28日(1869年12月30日)付, 『木戸孝允関係文書』第1巻, 8~13頁。
- 94) 明治5年1月22日, 『木戸孝允日記』一, 141~142頁。
- 95) 「ギムナジウム卒業試験制度」については, 『明治期のドイツ留学生——ドイツ大学日本人学籍登録者の研究』(雄松堂出版, 2008年)を参照されたい。
- 96) Minerva——Jahrbuch der Universitäten der Welt, Jahrgang 1, Straßburg 1891, S. 20.
- 97) 『青木周蔵筆記』第二。
- 98) F. ハルトゥング, 成瀬治・坂井栄八郎訳, 『ドイツ国制史』, 岩波書店, 1980年, 362頁。
- 99) 『青木周蔵筆記』第五。
- 100) 青木周蔵書簡, 木戸孝允宛, 明治5年8月3日(1872年12月30日)付, 『木戸孝允関係文書』第1巻, 28~29頁。
- 101) 円城寺清, 『大隈伯昔日譚』全, 三沢常次郎, 明治28年, 82~83頁。
- 102) 青木周蔵書翰, 半井春軒宛, 明治3年月日不明, 『防長医学史』下巻, 23~25頁。
- 103) 「醫學修業規則」, 「医業成立沙汰控」。「医学所規則」, 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 104) 『青木周蔵筆記』第一。
- 105) 明治6年11月20日, 『木戸孝允日記』二, 453頁。

Zusammenfassung

Der Lernprozeß von Shūzo Aoki vor dem Fahrt nach Deutschland 4

—— seine Studienzeit in Nagasaki 2. Abschnitt; Stuien ——

MORIKAWA Jun

Im Juli 1867 kommt Shūzo Aoki als medizinischer Stipendiat der Hagi-Regierung in Nagasaki an. Shūzo ist Adoptivsohn und Nachfolger des Leibarztes. Er hat aber keine Lust zum Arzt. Ein Jahr lang bleibt er in Nagasaki. In seinen Schreiben schweigt er sich über seine Fußabdrücke in Nagasaki aus. Was studiert und erlebt er in Nagasaki? In dieser Studie möchte ich seine Fußabdrücke in Nagasaki wiedergeben.